

JADS

JAPAN ART DOCUMENTATION SOCIETY

アート・ドキュメンテーション学会

JADS

アート・ドキュメンテーション学会

第13回 秋季研究集会 予稿集

2020年11月28日(土) 10:00~18:00

オンライン開催

アート・ドキュメンテーション学会 第13回秋季研究集会 プログラム／目次

2020年11月28日(土) 10:00 - 18:00

10:00 開会挨拶 赤間 亮 (アート・ドキュメンテーション学会会長)

【特別企画「オンラインでミュージアム情報を伝えるとは」】 10:10 - 12:00

p. 3

10:10-10:30 田良島 哲(国立近現代建築資料館、東京国立博物館)
自立できるデジタルミュージアムの構築

10:30-10:50 大橋 正司(サイフォン合同会社)
場としてのデジタルミュージアム
ストーリーテリングからナラティブへ。情報アーキテクチャの立場から視えてくること。

10:50-11:10 本間 友(慶應義塾大学アート・センター／慶應義塾ミュージアム・コモンズ)
コレクションの利用を進めるために:大学ミュージアムにおけるオンラインでの活動形成

11:10-11:15 休憩

11:15-12:00 ディスカッション
司会:鴨木 年泰(東京富士美術館)
大橋 正司、田良島 哲、橋爪 勇介(美術手帖)、本間 友

12:00-13:30 休憩

【第14回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・同推進賞 授賞式】 13:30 -14:00 p. 5

14:00-14:10 休憩

【秋季研究集会】 14:10 -16:50 (発表25分 質疑5分)

14:10-14:40 [発表1] 橘川 英規、田村 彩子、阿部 朋絵、江村 知子、山梨 絵美子 p. 8
(東京文化財研究所)

葛飾北斎絵入り版本群・織田一磨文庫のオープンアクセス事業
——ゲッティ研究所との協同による書誌情報国際発信: 古典籍書誌整備と資料保全

14:40-15:10 [発表2] 山路 正憲(立命館大学衣笠総合研究機構)、 p.10
赤間 亮(立命館大学アート・リサーチセンター)
ポータルデータベースシステムにおける多言語化・専門用語への対応事例について

15:10-15:40 [発表3] 毛利 仁美(立命館大学大学院文学研究科) p.12
ゲーム関連資料の保存意義に関する研究:小学館の学年別学習雑誌を事例として

15:40-15:50 休憩

15:50－16:20	[発表3] 赤間 亮(立命館大学アート・リサーチセンター) 舞台芸術資料のデジタルアーカイブー商業演劇の広報出版物を中心に	p.14
16:20－16:50	[発表4] 筒井 弥生(筑波大学アーカイブズ) 犬丸秀雄と学術資料収集	p.16
16:50	閉会の挨拶 古賀 崇(アート・ドキュメンテーション学会 幹事長)	
第15回 野上紘子記念	アート・ドキュメンテーション学会賞、同推進賞 推薦のお願い	p.19
アート・ドキュメンテーション学会	刊行物ご案内	p.22
アート・ドキュメンテーション学会	入会のご案内	p.23
『アート・ドキュメンテーション研究』	投稿の呼びかけ	p.25

Twitter ハッシュタグ #JADS2020autumn

特別企画

「オンラインでミュージアム情報を伝えるとは」

10:10 - 12:00

「自立できるデジタルミュージアムの構築」

田良島 哲

(国立近現代建築資料館、東京国立博物館)

2020年のコロナウィルス感染症の流行によって、ミュージアムの社会的活動は大きく制約されている。その中で、これまで一見非常に活発に見えたミュージアムによるインターネット上の動きが、実は大半が展覧会などリアルな活動の反映にすぎなかったことが明らかになり、あらためてミュージアムはネットを通じて社会に何を伝えられるのか、伝えるべきなのかを問われている。

報告者は別稿¹で、多くのミュージアムの運営におけるデジタル環境の利用が、展覧会等のリアルな活動への誘導に集中している「展覧会モノカルチャー」になっていることを指摘し、リアルな活動と並んでネット上に自律的なデジタル資源の利活用環境を構築し、そこに利用者を呼び込んで運営を助ける「デジタル多毛作」のアイデアを提案した。情報通信技術面での環境は、すでに整っており、課題はむしろ「展示室に人が来ること」ととらわれがちな設置者や学芸員の意識の転換であるのではないかと考えている。

本報告では、ミュージアムのネット利用について、その歴史を簡単に振り返るとともに、最近の技術の動向やミュージアムの事業に関わるプレイヤーの変化などを検討する。その上で、今後、持続可能な「デジタルミュージアム」のあり方について、いくつかの提言を述べる。

「場としてのデジタルミュージアム

ストーリーテリングからナラティブへ。情報アーキテクチャの立場から視えてくること。」

大橋 正司

(サイフォン合同会社)

COVID-19によってミュージアムが直面した数々の困難によって、改めてデジタルミュージアムが問われている。とはいえデジタル化されて「実体を引き剥がされたもの」はどのようにしたら価値を認めてもらえるのだろう。

ところでそれは、これまでボーンデジタル(つまり「実体のないもの」)が抱えてきた課題によく似ている。ボーンデジタルを生み出そうとしてきた人たちにとっても、その価値づけは切実な課題であり続けてきた。なぜそれが面白いのか。なぜそれがお金を払ってもらえるのか。なぜ人が集まってくれるのか。ゼロからなんらかのサービスを生み出そうとするときに、多くの開発者が頭を悩ませてきた。

そうしたボーンデジタルを取り巻く状況は、近年大きく好転している。特にインパクトが大きかった側面として、人間中心設計(HCDやUXデザイン)の浸透によるところが大きい。人間中心設計において重要なのは、ユーザーとの対話を目指す姿勢である。このパラダイムでは、発信した情報を受け取ってもらうこと(ストーリーテリング)だけではなく、受け手が語りを生み出せること(ナラティブ)、発信者と受信者の相互作用を重視する社会構成主義的なアプローチが取られる。

本発表では、橋爪氏のTwitter²における投稿に呼応するかたちで、2020年2月に開催された新しいミュージアムのありかたを考えるワークショップ「World IA Day Fukuoka 2020」の報告を通じ、Webサービス設計・開発領域における「デジタル化」の基本姿勢を紹介し、今後どのようなデジタルミュージアムの可能性が描きうるのかを考える一助としたい。

¹ 「行かない／行けない人のためのデジタルミュージアムと、それを支えるデジタルアーカイブ」アートスケープ／artscape 2020年7月1日号
https://artscape.jp/study/digital-archive/10162857_1958.html

² 「【緩募】アートに興味のあるウェブディレクターやウェブデザイナーの方々、「日本の美術館サイトはどうすればもっと良くなるか」という話しません? (そして記事にしたい)」2020.1.18.
https://twitter.com/hashizume_y/status/1218367780199657472

**「コレクションの利用を進めるために：
大学ミュージアムにおけるオンラインでの活動形成」**

本間 友

(慶應義塾大学アート・センター
／慶應義塾ミュージアム・コモンズ)

本発表では、展覧会という枠組みの外部での活動が相対的に大きく、また学生との関係性が強い大学ミュージアムにおける実践を参照しながら、ミュージアムのオンラインでの活動形成について検討したい。

大学が設置するミュージアム、「大学ミュージアム」の活動は多岐にわたり、一括りに論じることにはできないが、その成り立ちや活動が、教育・研究におけるコレクションの「利用」と強く結びついているという点で共通した特徴を備えている。大学ミュージアムは、展覧会や関連イベントの入場料を徴収しない場合が多いことから、集客性や来場者数といった基準から距離を取ることが可能であり、「展示」という枠組みからも比較的自由である。一方で、学芸員課程の教育や、各分野の専門研究など、大学の研究や教育に作品を利用できる環境を整えることが強く求められる。そのため、大学での実践から考えると、ミュージアムがオンラインで提供すべき情報は、第一にコレクションの利用のための情報となる。本発表では、大学で展開する様々な教育・研究の場に作品を届け、実際の利用を促すためにどのような取り組みが可能なのか、オーストラリア・マッコーリー大学の Object-based Learning の例、イギリス・オックスフォード大学のオンライン教育プラットフォーム Cabinet の例を引きながら考えるとともに、新型コロナウイルス感染症への対応の中で、日本でも導入が加速している Learning Management System との連携の可能性について考えたい。

パネリストプロフィール

田良島 哲（たらしま さとし）

文化庁国立近現代建築資料館 主任建築資料調査官／東京国立博物館 特任研究員

1959 年生まれ。京都大学大学院文学研究科修士課程（国史学専攻）修了。京都府教育庁文化財保護課、文化庁美術学芸課を経て。2003 年から東京国立博物館に勤務。調査研究課長、博物館情報課長を務め、資料情報の管理とデジタル化、デジタル情報の利活用に関する課題に取り組む。2017～19 年、内閣府「デジタルアーカイブ・ジャパン推進委員会」実務者検討委員会 委員。

鴨木 年泰（かもぎ としやす）@toshiyasukamogi

東京富士美術館 学芸係長（学芸員）

東京藝術大学美術学部芸術学科卒業。1996 年から現職。専門は日本美術史、刀剣。東京富士美術館では展覧会企画の他、美術情報資料・収蔵品データベースを担当。担当した主な展覧会に、特別ナポレオン展（1999 年）、大三国志展（2008 年）、中国陶磁名品展（2014 年）、101 年目のロバート・キャパ（2014 年）、レオナルド・ダ・ヴィンチと「アンギアーリの戦い」展（2015 年）、ザ・刀剣（2016 年）、蒔絵・美の万華鏡展（2016 年）、暁斎・暁翠伝（2018 年）、サムライ・ダンディズム（2019）など。1996 年より全国美術館会議 情報処理ワーキンググループ（2004 年に情報・資料研究部会に改称）に参加。2004 年より同研究部会 幹事。

大橋 正司（おおはし しょうじ）@shosira

サイフォン合同会社代表社員、モニカ株式会社取締役、Goodpatch Anywhere

東京大学大学院情報学環・学際情報学府修了。インフォメーションアーキテクト（IA）。ジャパンサーチの開発において、UX デザインと情報設計を担当。人間中心設計推進機構（HCD-Net）ビジネス支援事業部 HCSA 委員会委員長。コンテンツ文化史学会運営委員。

橋爪 勇介（はしづめ ゆうすけ）@hashizume_y

ウェブ版「美術手帖」編集長

1983 年生まれ。2005 年立命館大学国際関係学部卒業。「Art Annual online」および「新美術新聞」の記者を経て、2016 年に美術出版社『美術手帖』編集部に入社。

本間 友（ほんま ゆう）@yu_homma

慶應義塾大学ミュージアム・コモンズ専任講師、アート・センター所員。

慶應義塾大学大学院（美学美術史学）修了後、同大学アート・センターにて展覧会の企画、アーカイヴの運営、地域連携プロジェクトの立案を行う。2018 年よりミュージアム・コモンズの立ち上げに関わる。

造形美術における「境界」表現について、また学術情報の文化イベントを通じたディストリビューションに焦点を当てた研究を行っている。

<http://keio.academia.edu/yuhomma>

第 14 回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・同推進賞授賞式

2020 年 11 月 28 日

第 14 回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・推進賞選考委員会

標記の賞は、毎年会員の皆さまによりご推薦いただいた候補のなかから選考を行っています。第 14 回目となる 2020 年度は下記の通り、本年 6 月に開催した年次大会内において学会賞 1 件、推進賞 1 件の授賞を発表しました。この度、その栄誉を称えるため本秋季研究集会で授賞式を執り行うこととなりました。今後とも本賞の発展にご協力くださいますよう、お願いいたします。

第 14 回 野上賞選考委員会

高橋晴子（委員長）、赤間亮、川口雅子、田良島哲、水谷長志

◆第 14 回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞

〔賞の概要〕

『アート・ドキュメンテーション研究』、『アート・ドキュメンテーション通信』、その他の雑誌に掲載の論文・記事、図書、データベース、展覧会、ウェブサイトのなかから優れたものを選出。会員に限らない。対象となる論文・記事、図書、展覧会は、受賞年の前年度を含む過去 3 年間に発表されたものとする。

受賞	宮崎 幹子 氏（奈良国立博物館） 特別陳列「重要文化財 法隆寺金堂壁画写真ガラス原板 ―文化財写真の軌跡―」開催 （於奈良国立博物館 2019 年 12 月 7 日－2020 年 1 月 13 日）および同図録刊行に対して
授賞理由	本展示は、飛鳥時代の絵画を代表する法隆寺金堂壁画を撮影したガラス原板一式が、2017 年に重要文化財に指定されたのを機に企画された。文化財保護において写真が果たした役割を、ガラス原板、焼付写真、アルバム、刊行物などの多様な資料によって通観するとともに、1949 年の火災によって焼損した法隆寺金堂壁画の旧状を子細にうかがうことのできる高品質な情報の記録とそれを可能にした撮影・印刷技術を、原板自体や撮影機材、成果物によって紹介している。また比較のために、明治以来の手写彩色による高精度の模写作品数種を併せて展示している。 写真が、近代化の緒についた日本で失われつつあった文化財を視覚的に記録する最新の技術として大きな役割を果たしたことは、しばしば説かれるところだが、本展示は研究史を踏まえながら、その歴史的経過を幅広い実物資料によって説得的に示している。また、法隆寺金堂壁画の高精細写真による記録は、損傷した文化財のかけがえのなさをあらためて痛感させられると同時に、画像による文化財のドキュメンテーションの意義を雄弁に物語る。開催にあたって刊行された図録は、研究者のみならず写真技師、修理技術者などを含む関係者の業務上の成果と知見が反映しており、今後長く参照される資料となるであろう。以上の点から、本展示及び図録について、アート・ドキュメンテーション学会賞を授与するにふさわしい。

◆第 14 回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション推進賞

〔賞の概要〕

アート・ドキュメンテーション関係業務の現場において、効果的かつオリジナリティを発揮した者、あるいは機関を選出。会員に限らない。

受賞	文化財写真技術研究会 30年にわたり文化財写真の撮影技術と保存・管理・公開方法の向上に寄与してきた実績に対して
授賞理由	文化財写真技術研究会は、1989年に「埋蔵文化財写真技術研究会」として発足、2019年に創立30周年を迎えた。開発に伴って相次いだ埋蔵文化財調査に奔走していた調査担当者や写真技師の間で、情報や意見の交換と技術の向上を図るために発足したものである。まもなく奈良国立文化財研究所（奈文研）に活動の中心を移し、奈文研の技術的な研修と連携するとともに、会独自の講習会を各地で継続的に開催し、全国の文化財担当者への写真技術の普及に大きな役割を果たしてきた。またデジタル写真の急速な普及にともなう真正性の確保、長期保存、公開といった課題に取り組み、2003年には「文化財写真規範」を定めて、文化財写真に携わる者の倫理的な立場を明らかにしている。さらに、博物館資料や美術工芸品といった幅広い文化財が対象となってきたことに対応して、2010年には会名を現名称に改め、活動の領域を広げている。 このように本会は、文化財が含む情報を記録する写真に求められる独自の課題を、社会の変化や技術の進展に対応しながら業務の当事者間で共有し、研修や機関誌『文化財写真研究』を通じて、継続的に公表してきた。30年にわたるその活動が、文化財写真の社会的な認知と知見の普及に果たした役割は大きく、アート・ドキュメンテーション推進賞を授与するにふさわしい。

※ 第 15 回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・推進賞の推薦を募集しています。詳しくは、本予稿集巻末および学会のウェブサイトをご覧ください。 会員のみなさまには、ぜひ多くの推薦をお寄せくださいますようお願い申し上げます。

<http://www.jads.org/award/award.htm>

【第5部 秋季研究集会】

11月17日（日）13：30－16：50

葛飾北斎絵入り版本群・織田一磨文庫のオープンアクセス事業
——ゲッティ研究所との協同による書誌情報国際発信：古典籍書誌整備と資料保全

The Open Access Project of the Oda Kazuma Collection with a focus on illustrated books by Katsushika Hokusai : Disseminate bibliographic information globally in collaboration with Getty Research Institute : Standardization of bibliographic information and preservation of material

橘川英規★、田村彩子★、阿部朋絵★、江村知子★、山梨絵美子★

KIKKAWA, Hideki; TAMURA, Ayako; ABE, Tomoe; EMURA, Tomoko; YAMANASHI, Emiko
Resume:

東京文化財研究所は、ゲッティ研究所（米国ロサンゼルス）との日本美術の共同研究推進に関する協定を締結し、日本美術研究情報の国際的可視性の向上に取り組んでいる。その一環として、Getty Research Portal を介した日本刊行出版物の書誌情報発信の枠組みを確立、これまでに当研究所刊行物、近代美術雑誌、近代展覧会資料等のオープンアクセス化、GRP への書誌情報提供を実施した。2020 年 6 月には葛飾北斎絵入り版本を中心とする版画家織田一磨旧蔵書「織田文庫」を対象とした取り組みが完了、当研究所から GRP への貢献数は 1,727 件に達した。本発表では、この共同事業のあらまし、織田文庫の概要を説明し、本事業における資料保全、書誌情報整備の実践を報告する。また本事業で確立した「日本美術書誌情報の国際発信」の意義、課題及び発展性を提示する。

1. はじめに-事業の経緯・背景

インターネットの普及に代表される社会全体における電子化の進展に加えて、2020 年前半に各所で行われた新型コロナウイルス感染症拡大防止のための行動制約によって、学術情報を提供する活動のあり方も再考を迫られた。従来から関係者の間で指摘されてきた「国際的な日本美術情報の発信不足」という課題は、いよいよ喫緊なものとなっている。

当研究所では、独立行政法人国立文化財機構中期計画（第 4 期 5 年計画、2016～20 年度）に基づき、「我が国の文化財研究の拠点」としての役割を果たすべく、美術を含む有形・無形文化財に関する研究成果及び研究資料の国内外への発信を推進している。今期においては、国内学術情報プラットフォームへの情報発信体制を整備し¹、これに併行して米国、ロサンゼルスにあるゲッティ研究所（GRI）が運営する Getty Research Portal (GRP)²を介して、国際的な日本美術研究資料の発信方法を試行し、確立した。

GRI と当研究所は、2016 年 2 月に日本美術の共同研究推進に関する協定を締結し、これに基づき、これまでに GRI 副所長キャサリーン・サロモン氏招聘及びシンポジウム開催（2017 年）³、Getty Vocabulary へのデータ提供・公開に関する協議・準備（2016 年～）なども進めている。

2. 織田文庫の概要⁴

織田文庫は、織田一磨（おだ・かずま、1882-1956 年）の旧蔵書で、氏は抒情豊かな風景石版にすぐれた作品をのこした石版画家であり、浮世絵版画を好み、『北斎』『浮世絵十八考』などの著書も数冊上梓した人物でもある。

同文庫に収められる書物の刊行年代域は寛政 5（1793 年）から明治期、葛飾北斎絵入り版本を中心としたコレクションで、その分量は 136 種 327 冊にのぼる。1970 年に遺族から当研究所に寄贈され、当研究所では、はやくから重要なコレクションと位置づけ、当研究所公式サイト上に紹介ページを設置⁵、仏伝の読本『釈迦御一代

¹東京文化財研究所刊行物リポジトリ開設・JAIRO 参加（2016 年）、NII 総合目録データベース NACSIS-CAT 加盟（2019 年）。橘川英規、NACSIS-CAT（CiNii Books）への加盟、東京文化財研究所-活動報告、2019-03、

<https://www.tobunken.go.jp/materials/katudo/817006.html>, (Accessed 2020-10-28)

²Getty Research Portal (GRP), <http://portal.getty.edu/>, (Accessed 2020-10-28)

³江村知子、橘川英規、山梨絵美子翻訳・編集『研究会「キャサリーン・サロモン氏(ゲッティ研究所副所

長)講演会—日本美術資料の国際情報発信に向けて』報告書』東京文化財研究所、2018 年。

https://www.tobunken.go.jp/japanese/publication/seminar/Kathleen_Salomon20171206.pdf, (Accessed 2020-10-28) .

⁴「織田文庫」、東京文化財研究所編『東京文化財研究所七十五年史』本文編、中央公論美術出版、2010 年、pp.250-251.

⁵所蔵資料紹介織田文庫所蔵の絵入読本、<https://www.tobunken.go.jp/~joho/japanese/collection/oda/oda.html>,

*きっかわ ひでき、たむら あやこ、あべ ともえ、えむら ともこ、やまなし えみこ（いずれも東京文化財研究所）

記図絵』(1845 年)、狂歌絵本『潮来絶句集』(1802 年)の2件については、細目を付して、その全ページの画像を公開してきた。

3. 織田文庫のオープンアクセス事業

2019 年 11 月、GRI と当研究所は、当研究所所蔵江戸期版本(織田文庫を含む)836 冊をオープンアクセス化し、GRP に収録することを定めた契約を締結した。実施事項としては、(1) 版本 PDF ファイル作成及びインターネット公開、(2) PDF ファイル URL を含んだ書誌情報の整備、(3) この書誌情報群の GRI への提供、(4) GRP への収録、以上の 4 つに大別される。これを(1)、(2)、(3)は当研究所が、(4)は GRI がそれぞれの役割を担い、双方の担当者が、適宜、連絡・協議を行いながら事業が進捗した。

3.1 古典籍デジタル化に際しての資料保全

今回は、外部業者によるデジタル化の前後に、原資料に対する保全作業を一連の工程に組み込む試みを行った。

個人文庫であり、研究所の移設など保管環境の変遷を経た織田文庫には、用紙の擦れや部分的な欠損、害虫による虫損といった物理的損傷が多く見られた。保全処置にあたっては、織田氏が所有、利用していた時代を想起させる、よく使い込まれた版本の風情を損なわないことを考慮に入れ、判読性の改善、スキャニング作業における安全性の向上、今後の保存に適した状態に整えることを目標とした処置を行った。具体例として、ドライクリーニング、折れしわの軽減、破損の修理、虫害対策などがある。

このように紙資料のライフサイクルにデジタル化が組み込まれるケースが一般的となっていく中で、改めて図書館業務における原資料に対する保全作業の重要さは増している。

3.2 書誌情報整備

2020 年 2 月後半より 3 名が、当研究所の既存の書誌情報を基に CiNii のコーディングマニュアル(和漢古書に関する抜粋集)に沿った書誌情報整備(PDF リンク含む)に取り組んだ。当初はネットワーク上のデジタル画像及び原本を閲覧しながら図書館システム(ネオシリウス)上に直接登録したが、3 月末から 5 月末までの在宅期間中は、HDD に保存した画像を閲覧しながら Google スプレッドシート上で修正を加えた。この間、CiNii 書誌、国文学研究資料館の新日本古典籍総合データベース及び『国書総目録』PDF

版、国立国会図書館デジタルコレクションなど、他館の古典籍書誌・画像を参照しつつ、織田文庫書誌の最終確認作業を行った。

出勤可能となった 6 月以降は、図書館システムへ修正内容を反映させ、CiNii にオリジナル書誌をアップロードした。その後、織田文庫 136 種 327 冊のタイトル・責任表示・その他の標題などをローマナイズし、画像リンクと共に GRI ヘデータを提供した。

4. まとめ—本事業の発展性と課題

2020 年 9 月に、織田文庫の書誌情報が GRP に収録され、公開された⁶。その意義としては、(1) GRP 参加他機関所蔵版本との横断検索の実現、

(2) 日本語ネイティブによる日本古典籍の書誌レコードの共有が挙げられる。(1)は GRP の基本機能であるが、今回、当研究所が提供した書誌情報には、GRP 参加の他機関にならって、その件名に「Japanese Illustrated Books」(=版本)と入力した。これによって、例えば、「Hokusai」と「Japanese Illustrated Books」との掛け合わせ検索をすれば、当研究所、メトロポリタン美術館ワトソン・ライブラリー、大英博物館、フリア美術館など GRP 参加機関が所蔵する北斎絵入り版本が、検索結果として一覧であられるもので、美術史学の研究上にも有効な機能である。さらに(2)に関していえば、日本語が得意な当研究所が日本の版本の多様な書名等を読み解き、採録し、GRP にて共有した。他機関所蔵本も書誌比較に有用と考える。

一方で、本事業を進めるにあたって実感した課題として、GRP における日本機関提供コンテンツの僅少さが挙げられる。当研究所による提供件数のみでは、GRP ユーザー(日本美術研究者)に本格的に寄与するものとは、まだいえない。それゆえに、当研究所と GRI による事業の継続は重要であり、また本事業を機に確立した日本美術研究資料の GRP 提供・発信ルートを活用し、私たちが国内美術関連機関のデジタルコンテンツと GRP を繋ぐ〈仲介役〉を担うことも、この課題の解決策となりうると考えている。

本事業で構築した GRP 提供・発信ルートは、国内機関が所蔵する美術研究に資する書物が海外研究者に発見される可能性を、飛躍的に高め、国際的な日本美術研究を活発し、その推進につながる有効なツールだと考えている。これを「国内関係機関の共有財産」としても、さらに効果的・発展的に活用していくことができれば、開発者としても本望である。

⁶ Getty Research Portal (GRP), [Oda Kazuma Collection], <http://portal.getty.edu/search?from>

=0&size=25&sort=relevance&adv_provenance=Kazuma&adv_provenance=Oda

ポータルデータベースシステムにおける多言語化・専門用語への対応事例について

Examples of multilingualization and handling of technical terms in portal database systems

山路 正憲*, 赤間 亮**

YAMAJI, Masanori; AKAMA, Ryo

Resume:

立命館大学アート・リサーチセンターでは多数の浮世絵・古典籍等様々な形態の資料を所蔵し、これを簡易に検索、利用するためのデータベースシステムを継続的に開発してきた。プロジェクト毎に乱立していた小データベースを分野の近いもの同士で統合し、また活動が活発化するにつれ、提携する海外の美術館や博物館の資料、多国籍研究チームの収集する研究資料などもそこに組み込むことで大規模なポータルデータベースシステムとした。そのためデータベース開発当初には想定されない形態の資料、多言語の利用者も増加し、これらに対する対応が急務となった。

この現状を解決すべく、本発表では、様々な言語・形態の資料を包含するポータルデータベースシステムを維持しながら、共通のメタデータ構造を保ちつつ検索システムの多言語への対応、同一言語内での専門用語のバリエーションに対応する事例を紹介する。

1. まえがき

以前より、立命館大学アート・リサーチセンター（ARC）では浮世絵、古典籍、その他様々な資料形態や背景、用途を持ったデータベースが100件以上乱立していたため、同一や類似の資料形態を持ったデータベースを統合し、ポータルデータベースとすることにより、データ管理の一元化・簡便化をはかり、より効率の良いデータ収集・蓄積・横断検索などが可能となった。¹

しかし一方、統合の弊害として、各資料形態に特有のメタデータ項目名が汎用的な項目名へと一般化され、データベース利用者にとってはわかりづらい表現になってしまう問題があった。

また、立命館大学アート・リサーチセンターは国際共同利用・共同研究拠点に採択され、多国籍・多言語の研究者をチームに招いての研究が活発となった。効率的なデータベースシステムの多言語化が急務となり、各言語での各分野特有の表記が存在するものについてはそれぞれのデータベース項目に対して

1) 言語別の表記

2) 分野別の表記

この両方に柔軟に対応する、言語・用語とデータベース項目の関係性をコントロールできる用語管理システムが必要となった。ここでは、この多

言語化・用語への対応について、事例を交えて紹介する。

2. 先行事例

データベースシステムや Web サイトの自動翻訳分野は AI を活用したものなど、既に製品として提供している企業は多くあるが、今回の目的は自動化ではなく、データ提供者の意図通りのデータ項目名を付与して公開する手法の確立であり、意図にそぐわないため、そういった自動化サービスの導入は行わず、独自に開発することとなった。

また、検索結果のメタデータについて自動翻訳する研究などもあるが、今回の内容はユーザーインターフェースについての多言語化・用語特化であり目的が異なるものとなる。

3. システムの概要

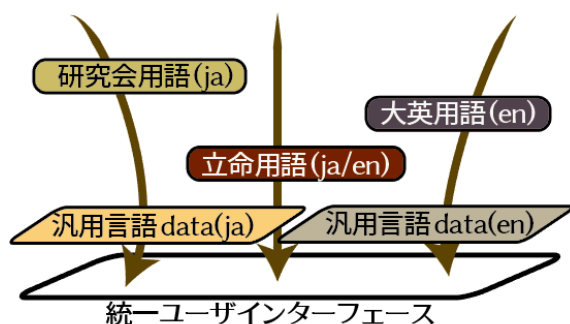
立命館大学浮世絵ポータルデータベースでは様々な小データベースを吸収し成長してきた経緯があり、小データベースではそれぞれの資料種別ごとの項目呼称が最大限尊重され、ダブリンコアでいう「title」となる項目について、「作品名」「書名」「代表項目名」など様々な名称がつけられていたが、この状態は管理上問題があり、一点の資料に対して、複数の所属・属性があればそれぞれのデータベースに別個に登録され、かつその両方のメタデータが統一されておらず、管理者

*やまじ まさのり（立命館大学衣笠総合研究機構）

**あかま りょう（立命館大学 文学部）

も別の人間であるため統一的な対処ができないといった問題があった。これを改善するため、データ型の近い一枚物の画像を一元管理することのできるポータルデータベースを構築し、これを浮世絵ポータルデータベースとした。その上で、資料の所蔵先、利用者の別などにより、検索ターゲットとする資料を個別に指定して制限した「入口分割」システムを設け、巨大なポータルデータベースの一部を切り取り、各博物館・美術館・研究グループ等の個別のデータベースとして活用することが可能となった。このことにより、データの管理や隣接分野の横断検索などは容易となったが、一方で個々のデータベース特有の項目名などは、代わりの効かないものは除き、汎用的な項目名とせざるを得なかった。

だが、その後共同利用・共同研究拠点としての活動が深まるにつれ、海外の博物館・美術館・個人コレクションなどの所蔵品、銅版画・地図・書簡などのこれまでの浮世絵主体の項目とはそぐわない資料が増加し、抜本的な対応が必要となった。そこで着手したのが本研究、多言語化・専門用語カスタマイズシステムの開発となる。(図1)



(図1 ジャンル別・言語別カスタマイズの例)

本システムの構造は(図1)の通りとなる。まずポータルデータベースシステム全体にわたり利用される、すべての用語を登録した辞書ファイルを作成する。同時に、そのすべての用語に関して、多言語化したい言語について定義した言語フ

ァイルを作成する。その後、個々の「分割入口別」特有の用語があれば、各入口別の設定ファイル内にて、「言語別」「ジャンル別」固有のカスタマイズを柔軟に設定することが可能となる。

実際の活用例では、ARC 浮世絵ポータルデータベース²において「作品名」となっている項目は、英語表記で「Title」となるが、口絵のみを取り扱うジャンル別入口「口絵ポータルデータベース³」ではそのジャンル特有の用語として「書名」となる。また、浮世絵で「配役」となる項目は、口絵においては「被写人物」となる。ジャンル別用語の指定がなければ、汎用言語 data がそのまま表示される。(図表2)

フィールド定義名	field83	field83	field6	field1
汎用言語 data	(ja) 作品名	(en) Title	(ja) 配役	(en) AcNo.
口絵 (ジャンル)	(ja) 書名	-	(ja) 被写人物	(en) ARCNo.
画面表記	書名	Title	被写人物	ARCNo.

(図表2 口絵データベースでの対応例)

4. システムの展開

本システムは拡張性をもたせて設計しており、構造上すべての言語を追加可能である。また、この設定ファイルは平易なテキストファイルであり、特殊なソフトウェアやプログラミングの知識は不要で、文系研究者が独自に各々の専門知識を反映させ、設定することが可能となる。今後、この方式による「ジャンル型入口」データベースが多数作成され、細かな分野別用語の事例を多数収集することができれば、ダブリンコアや IIIF のような形式を利用してメタデータのやり取りを行う際に、各言語・各分野でそれをどのような用語に置き換えればよいか、という候補を提供する、分野別用語データベース・情報提供 API として広く貢献できるのではないかと考える。

¹ 赤間亮「専門分野別研究資源ポータルデータベースと相互リンクによるユーザビリティ」, 『2016 年度アート・ドキュメンテーション学会年次大会予稿集』(2016 年 6 月), pp.38-43

² ARC 浮世絵ポータルデータベース, https://www.dh-jac.net/db/nishikie/search_portal.php, (Accessed 2020-11-01)

³ 口絵ポータルデータベース, https://www.dh-jac.net/db/nishikie/search_kuchie.php, (Accessed 2020-11-01)

ゲーム関連資料の保存意義に関する研究：小学館の学年別学習雑誌を事例として

A Study on the Significance of Preserving Game Related Materials: A Case of Graded Study Magazines for Primary School

毛利 仁美*

MOHRI, Hitomi

Resume:

ビデオゲームの保存研究における小学館の学年誌の位置づけを考察する。1950年代ごろからの学年誌における娯楽記事の編集ノウハウの蓄積は小学館の強みとなり、1980年前後よりビデオゲームも取り上げられるようになった。学年誌ではゲーム専門誌以前よりビデオゲームを取り上げ、また子供の成長に合わせて学年ごとに記事の内容が異なることがわかった。

1. はじめに

近年、ビデオゲームの保存の研究においては、ゲームソフトとその動態保存だけでは失われるビデオゲームのコンテクストがあるという指摘がある。ビデオゲームの本質の一つが「操作」することにあるが、プレイヤーのゲームプレイの仕方、ビデオゲームがプレイされる場等が国内では保存の取り組みの射程に入っていない¹。そこで、その保存をしていく上でビデオゲームの関連資料への期待が高まっている。

本稿では、関連資料の中でも雑誌メディアとして、株式会社小学館（以降、小学館と表記）より販売された学年別学習雑誌（以降、学年誌と表記）におけるビデオゲームの記事を取り上げる。その上で、ビデオゲームの保存の研究における学年誌の位置づけを考察する。なお、主な資料としては、1945年から2000年までの『小学一年生』、『小学三年生』、『小学六年生』の三学年分の雑誌と学年誌の編集者等のインタビューが掲載されている書籍等を用いる。

2. 学年別学習雑誌の位置づけ

ビデオゲーム研究における雑誌としては、主にコンピュータ専門誌、ゲーム専門誌、『月刊コロコロコミック』と『週刊少年ジャンプ』のビデオゲームに関する記事が対象とされている²。しかし、ゲーム専門誌はビデオゲームのブームが起きた1986年から相次いで創刊されており、1970年代から始まるビデオゲームの黎明期にあたる時期を欠いている。コンピュータ専門誌に一部家庭

用ゲームが載ったこともあると思われるが、その時期や対象はまだ明らかになっていない。漫画雑誌の創刊はビデオゲームの歴史よりも早い³が、1985年ごろからの記事の分析にとどまっている。

これらを踏まえて、学年誌を取り上げる意義は3つある。第一に、対象年齢が各学年であり明確である。第二に、児童向け雑誌として戦前から存在する点でゲーム専門誌等以前の空白をカバーできる可能性がある。第三に、ゲーム専門誌ではないためビデオゲームへの注目度や理解度がページ数や内容から判断可能である。

3. 分析と考察

3.1 学習雑誌から娯楽性の強い雑誌へ

小学館の学年誌は男女向けの月刊誌である。1922年9月に『小學五年生』と『小學六年生』が創刊され、1925年3月に全学年が揃った。

1967年に小学館に入社した野上暁によれば、『小学一年生』編集部では、新入社員はまず読者の学習の理解の程度を学ぶため、学習ページや名作のリライト、読み物のページの文章を担当する。それと同時に、野上は手塚治虫を始めとするマンガの担当をする³。1971年に「帰ってきたウルトラマン」の雑誌記事の使用を小学館が独占することが決定し、野上を中心に『幼稚園』から『小学六年生』までの各学年誌を横断したプロジェクトチームが作られ、円谷プロダクションとの付き合いが始まる⁴。「ドラえもん」は『よいこ』『小学館の幼稚園』『小学一年生』～『小学四年生』で全て1970年1月号から連載を開始した。1977年

*もうり ひとみ（立命館大学大学院文学研究科）。

に入社した黒川和彦は、入社後『小学三年生』で「ドラえもん」のマンガを担当し、その後「ドラえもん」のテレビ化と映画化で最初のブームが起きた時、学年誌でマンガとグラフを連動させてブームを作っていくノウハウを学んだという⁵。

このように、学年誌は学習雑誌をうたいながらも、次第にマンガやテレビ番組等の娯楽記事の存在が強くなっていった。一方で、娯楽記事の編集に際してはマンガ、アニメ、玩具等の企業との連携がなければ不可能である。これらの企業の付き合いと娯楽記事の編集ノウハウの蓄積は小学館の強みとなり、子供たちの流行に敏感かつ支持される雑誌を生み出すこととなった。1977年創刊の『コロコロコミック』は創刊時の編集者が学年誌出身であり、記事編集ノウハウが引き継がれた。ビデオゲームはこのような蓄積の末に1980年前後より取り上げられていく。

3.2 1980年代の学年誌におけるゲーム記事

1980年代のビデオゲームに関する記事の合計数を年度別に調査した結果、1986年がページ数の合計のピークであった。1983年7月15日に発売されたファミリーコンピュータの初出は、『小学一年生』が1985年7月号、『小学三年生』が1984年12月号、『小学六年生』が1985年4月号である。ファミリーコンピュータの登場以前は、『小学三年生』では電子ゲームの特集として攻略方法やカタログが掲載された。『小学六年生』では、電子ゲームに加えてパソコンを取り上げており、プログラミングの方法や小学生が手にするには高額なものも含めたカタログが掲載された。

1986年2月21日に発売されたファミリーコンピュータの周辺機器であるディスクシステムが登場した際は、同日に発売した「ゼルダの伝説」の攻略を漫画の形式でする攻略漫画が『小学三年生』と『小学六年生』に掲載される。『小学三年生』では、主人公のリンクの視点で、ビデオゲー

ム中で進行するストーリーに沿って敵の攻略の仕方を説明している。一方の『小学六年生』では、ストーリーの説明ではなく、架空のプレイヤーの視点で、ゲーム内容がセーブ可能、容量が増加したディスクシステムでのビデオゲームは、これまでのものとどのような点で異なるかを説明した上で遊び方を解説しており、内容が高度である。

どの学年誌もビデオゲームの攻略方法やカタログが主な記事であるが、ビデオゲームが動く仕組みや製作過程、キャラクター集、女の子向けのビデオゲーム紹介等、ゲーム専門誌にはないような特集も見られた。1991年3月までに発売されたファミリーコンピュータのソフトのうち、三学年分の学年誌で半ページ以上を使用して紹介されたのは182タイトルであったが、1988年頃までは任天堂株式会社のゲームソフトは発売日を数ヶ月過ぎて掲載されており、ミリオンセラーを達成したものでも速報性が低い。

4. おわりに

『小学三年生』と『小学六年生』の1986年以前の記事では、電子ゲームやパソコンの記事が見られ、この二学年は早くからビデオゲームに着目していたことが明らかになった。また、ビデオゲームの記事は各学年の子供の成長に合わせて編集され、記事の内容が異なることもわかった。ただし学年誌の限界として、読者の投稿で成り立つ記事がほぼないことから、当時の子供たちがどのようにゲームを理解していたかを知ることは難しい点が指摘でき、留意する必要がある。

今後の課題としては、そもそも学年誌の内容を分析した先行研究が数少ないため、全体的な雑誌の特徴を掴み、この雑誌が果たした役割の精査が必要である。その上で改めてビデオゲームにおいては、特にファミリーコンピュータと1996年より発売された「ポケットモンスター」シリーズの2つの大きなブームを理解する必要がある。

¹ 毛利仁美「ビデオゲームの保存活動における対象と方法—国内外の実践事例および研究の批判的検討」、『アート・リサーチ』第20巻(2020), pp.21-36. <http://doi.org/10.34382/00013013>, (Accessed 2020-11-01)。

² 上村雅之・細井浩一・中村彰憲『ファミコンとその時代：テレビゲームの誕生』NTT出版, 2013年。

³ 野上暁『小学館の学年誌と児童書』(出版人に聞く18), 論創社, 2015年。70-73p, 77p。

⁴ 野上暁『子ども文化の現代史：遊び・メディア・サブカルチャーの奔』大月書店, 2015年。105p。

⁵ 渋谷直角『コロコロ爆伝!!1977-2009：定本『コロコロコミック』全史』飛鳥新社, 2009年。58-59p。

舞台芸術資料のデジタルアーカイブ ——商業演劇の広報出版物を中心に

How to digital archive the materials of performing Arts
- Focusing on commercial theater materials

赤間 亮*

Ryo, Akama

Resume:

時間とともに実態の消える舞台芸術の資料は、その実態を復元するためのツールとして重要である。また、商業演劇の場合は、広報資料を中心として膨大な数が残されてきた。本稿では、舞台芸術資料の特性に触れながら、それらをカタログリング、デジタルアーカイブするために枠組みを提示したい。

1. はじめに

舞台芸術、なかでも、商業活動としての舞台公演にともなって生成される資料は、公演の度に大量に放出され続けてきた。たとえば、公演ポスター、チラシ、プログラム類である。発表者は、40年近くに亘り、これらを対象としたアーカイブを手懸け、原物資料の整理と同時に、イメージデータベースとしてオンライン公開を行ってきた。その間に関わった代表的な資料所蔵機関としては、早稲田大学演劇博物館、国立音楽大学附属図書館、松竹大谷図書館、立命館大学アート・リサーチセンター（ARC）などがあるが、演劇博物館以外は、現在でも資料アーカイブとオンライン公開の業務を外部から協力するか、直接に実務として資料アーカイブの役割を担い、ここ数年、オンライン型情報発信を強化している。

2. 舞台芸術資料・興行資料

演劇博物館では、発表者が在籍していた当時は、次々と入ってくる「興行資料」に対しては番号の付与すら間に合わず、“段ボール配架・リストナシ”状態が長く続いていた。松竹大谷図書館の場合、松竹株式会社の公演を基本としているが、それでも演劇・映画関係資料の寄贈が後を絶たない。こうした現代進行形の興行型芸術分野における専門館の物理的な容量超過については、連携・分散型収蔵などによる解決策が必要であろう。しかし、本稿では、ここが中心的課題ではない。

対象となる資料の例を示す。

1) 台本 2) 台詞・詞章 ※販売用・内部資料

3) プログラム（冊子） 4) チラシ・ポスター

5) プロマイド

6) 演劇雑誌 7) 新聞記事

1) 台本や2) 台詞・詞章は、そのまま書籍としての形態があり、図書資料として管理することができるが、通常の本誌情報が得られない場合が多い。刊行されたものであっても、刊行年はわからず、その台本にとって最も重要な情報は、作品の上演時、上演場所、演出・監督であり、出演・演奏スタッフであり、作品の原作者ではない。したがって、著者を最重要とする通常の本誌と同様にカタログリングすると不具合が生じる。

3) プログラムから5) プロマイド、さまざまなエフェメラ、公演グッズなどが、本稿の焦点となるが、現状、これらがDB化されオンライン型管理にまで至る事例は非常に少ない。商業演劇の場合、著作・制作の権利保護を十分に考慮する必要がある点も状況を複雑化する要因ではあるが、最大の問題は、実務的に有効で包括的な手法についての共有化ができていないことによる。

3. 上演情報と資料整理の連携

舞台芸術資料の基本性質は、上演を伴うという点である。上演実態は消えてしまうが、上演・企画を情報化して上演年表DBが構築されれば、そこに資料を統合することが可能である。

上演年表データベースの場合、データの1単位は、1演目であり、1公演ではない。プログラム上に複数の「出し物」が並ぶ音楽コンサート、あるいは学会なども同じ考え方になるであろう。1

公演と1演目は、図書情報での親書誌・子書誌の関係になる。孫書誌は、舞台芸術の場合、場・幕という単位になるが、これは個別資料側がデータを持つことで解決する。台本が作品（演目）単位に存在すれば、子書誌にあたる1演目に紐付けられ、プロマイドが1場面を写していれば、演目に紐付け、プロマイド側の個別データとして場・幕名の情報が付与される。

舞台芸術資料カタログングにおいては、資料に上演年が記載されておらず、結局上演年表を繙き「出版年月日」を特定することになることが多い。問題は、資料ごとに年月日が異なっていたり、劇場名の表記が違う場合がある点である。また、実際、公演内容は、興行中に変化していく場合があり、資料間の矛盾が生じることがある。むしろ演劇研究にとっては、ここが最も貴重な情報である。

こうした矛盾に対してDBシステムが機能するのだろうか。理論的には、完全な演劇上演年表DBがあり、すべての演目データにIDが付与され、そのIDによって、資料の帰属先である興行+演目が呼び出されればよいが、現実には、そうならない。上演年表（コト）DBと資料（モノ）DBとを有機的に連動させるためには、ある工夫が必要である。それは、二つのDB間の連結を緩やかに連結させることである。具体的には、二つのDB間の連携は、「年」（月日は使わない）と「場所」で関連づけ、「演目」を補助的に使うことで解決する。これは、観客の入り（収入）を期待する演劇興行が、一年の内に、同じ演目を同じ劇場（劇団）が上演することはないという性質によっている。

4. 上演情報と資料整理の連携

次に、上演年表か先か、資料整理が先かという問題になるが、現実には、過去の演上演記録でオンラインDB化されているものは数える程しかなく、典拠DBとして設計されていないし、公開状況も不十分である。

従って、これからデジタルアーカイブが加速化されるであろう戦前の古い資料などについては、a) 資料を目の前にして上演実態があったことをもとに、資料から上演情報を仮に登録し、その情報を使って資料個別情報を取り込む方法と、b) すでに蓄積されている資料DBの情報をDB内検

索することで取り込み、データを複製入力して個別の情報のみを加える方法の併用というハイブリッドな機能を備える必要がある。

この機能は、すでに立命館ARCの「演劇・映画興行年表」と資料DB群において実現している。

これらは、基本的に発表者の資料整理の経験により設計されたDB群であり、実際の資料整理の経験から帰納した結果である。現在は、他機関の資料アーカイブにも活用するポータルDBとなっており、同時に、国際共同利用・共同研究拠点に提供しており、外部利用が可能である。

一方で、上演情報については、資料情報から上演情報を取り込みつつも、登録時におきる重複情報などを整理してリフレッシュさせる必要もあるが、完璧な状態に至っておらず、資料の出現によって新たな情報が加わることも多い。戦後に関しては、松竹大谷図書館のプロジェクトにより情報が提供されているが、さまざまな劇団の公演があるので、資料整理は、常に上記のa)の方法を取らざるを得ない。

しかしながら、戦前の上演情報の蓄積も、当初は0からのスタートであった。この方法が効率的なのである。戦後については、演劇情報誌や演劇情報サイトや、劇場・劇団単位で蓄積された情報の提供を受けながら、ハイブリッド型の資料整理環境を整えていくことで解決させる必要がある。

5. おわりに

舞台芸術資料は、図書館の灰色文献の最たるものである。演劇専門の図書館・博物館においても完全に整理する手法を持っているわけではない。専門図書館は数の限界があるが、膨大な数の公演は続いていく。この大量のものが東京の数カ所に集中すれば、組織内で物理的な破綻がおき、段ボール配架となる。演劇文化にとっては、これらを相互に持ち合う分担所蔵の方が、有効であろう。

歴史的な資料として、専門図書館ではない所蔵機関に持込まれた場合に、特殊性ゆえに量が少なくても“段ボール配架”となる。しかし、少なくとも、物理的な問題を伴わない演劇資料については、国際共同拠点として提供している「演劇・映画興行年表」と資料DB群を活用してもらえれば、状況は打開できる。情報の提供をお願いしたい。

犬丸秀雄と学術資料収集

Hideo Inumaru and Collecting Academic Materials by Ministry of Education

筒井 弥生*
TSUTSUI, Yayoi

Resume:

犬丸秀雄(1904-1990)が文部省官僚として携わった学術資料収集について紹介する。第二次世界大戦中に、学術文献の入手が困難になったことから、これを積極的に蒐集し、論文題目を大学や研究機関に配布した。戦後は、人文科学研究の振興に尽力し、文献目録作成にも寄与した。

1. はじめに

1.1 2020年6月の報告と本報告について

本年6月28日のJADS年次大会研究発表会で「犬丸秀雄と文化財保護」と題して報告した¹。コロナウィルスの蔓延に伴い、ほとんどの図書館が休館していたため、文部省史料館設立関係が報告の中心となった。今回は、対象年代を少し遡り、1940年代を中心とする。

1.2 先行研究

国立国会図書館憲政資料室「犬丸秀雄関係文書」を用いた論考には水沢光の論文が、文部省の文書については本村慈の論文がある²。

1.3 犬丸秀雄をJADSで紹介するきっかけ

10年程前のこと、犬丸秀雄関係文書を閲覧した折、生物学の並びにドキュメンテーションの語を発見した。今回確認したところ、日本学術会議の資料(32-11-3)で、1956年の組織図にあった。

2. 文部省事務官として

昭和15(1941)年犬丸秀雄は第四高等学校教授から高等官として文部事務官に任ぜられ³、科学振興の事務を担当、以下の事業に携わった。

2.1 文部省専門学務局外国科学文献翻訳事業

外国学術文献の入手困難、学生の修了年限短縮などを背景に、科学文献翻訳事業が始められた。翻訳する書籍の選定、翻訳者を選定・依頼、出版社(丸善、岩波書店等)による刊行、国内高等教育機関や研究所等への配布が実施された。この事業は戦後も引き継がれた。

2.2 文部省専門学務局・科学局総合報告発行事業

物理学、化学、医学の総合報告を発行した。

2.3 文部省専門学務局・科学局速報事業

昭和17(1942)年4月、「独逸ニ於ケル科学論文題目速報事業実施案」が立案、稟議された。外務省、在独日本大使館、在独技術者協会の協力を得て、論文の題目の通報を受け、その内容と抄録を国内で印刷配布、それを見た国内研究者は文部省に詳報を求めることができる仕組みだ。理学、工学、医学、農業分野の学術雑誌を購入した。

2.4 欧州における文献蒐集事業と速報事業

科学技術雑誌がさらに入手困難となり、1943年には犬丸が欧州に派遣され、現地での蒐集作業にあたった。学術雑誌や文献の購入には中立国スイスの通貨が必要でその入手にはじまって、欧州各所を訪問して購入した。購入した文献は、題目を電信、実物は様々な送付法を試みたが、中立国からの郵送が有効であった。戦局はどんどん悪化、戦火をくぐって蒐集するも、ついに断念、北ドイツに進駐してきたソ連軍に軟禁され、送還された。

3. 文部省科学教育局人文科学研究課長として

終戦後、科学局は、技術院が廃止されるとともに、その機能及び職員の一部を吸収して科学教育局に拡大されたのち、四課制に改組された。犬丸は、新設の人文科学研究課課長に就任、課は、「戦時中、極端な言論の圧迫によって自由な発達を阻害されていた我が国の人文科学を積極的に振興しようとする意図から生まれたもの」⁴という。

戦前からの外国科学文献はじめ学術資料の蒐集、文部省史料館設置につながる社会的経済的変動によって散逸の危機にある史料の蒐集などの事業を、新しい学術体制を進めつつ、行っていた。

*つつい やよい (筑波大学アーカイブズ)

4. 人文科学委員会幹事として

4.1 人文科学委員会

人文科学研究課は、昭和 21 (1946) 年 9 月 3 日文部省訓令によって人文科学委員会を設置し⁵、人文科学の発達及び普及を図った。人文科学研究課長はその幹事を務めた。

4.2 『人文』⁶の刊行

人文科学委員会の機関誌として『人文』を刊行した。昭和 22 (1947) 年 3 月に出版された創刊号の内容は、経済学の山田盛太郎の学術論文、法学の尾高朝雄、文学の西尾実、歴史学の林健太郎、哲学の山崎正一の学界の展望や課題に、人文科学委員会第一回の開催時の文部大臣・田中耕太郎の挨拶「人文科学の振興について」で、学界消息、学会研究所一覧、研究者要覧、文献目録が併録され、人文科学研究助成金の告知もある。文献目録作成は、東京大学の各研究室の若手による。

『人文』第 1 巻 2 号は同年 6 月に刊行、人文科学委員会第一回学術大会（経済学）報告と米国寄贈雑誌目録が加えられた。『人文』第 2 巻 1 号は、昭和 23 (1948) 年 2 月に刊行、各分野からの各分野からの論考に、人文科学委員会第二回学術大会（歴史学）報告、学界消息、研究者要覧、文献目録に書評が加わった。第 2 巻 2 号は、同年 9 月刊行、人文科学委員会第三回学術大会は哲学、人文科学研究助成金の研究報告要旨が加わった。また人文科学研究者の経歴に関する調査が行われ、その中間報告が掲載された。『人文』第 3 巻 1 号は、昭和 24 (1949) 年 3 月に、第 3 巻 2 号は、昭和 24 (1949) 年 9 月に刊行された。ここまでは、犬丸による跋文や編集後記が掲載されている。また、昭和 23 (1948) 年 6 月には人文科学叢書 1 号とし

て『土地制度の研究』が、昭和 24 (1949) 年 7 月には『人文』特集号 1 として「日本の人文科学 回顧と展望」が犬丸の編集によって刊行された。昭和 25 (1950) 年に『人文』第 4 巻第 1 号、昭和 26 (1951) 年『人文』特集号 2 が発行されて、人文科学委員会は民間の日本人文科学学会となった。

5. おわりに

犬丸秀雄の軌跡は、国立公文書館の公文書、国立国会図書館憲政資料室所収「犬丸秀雄関係文書」、犬丸秀雄の著作（『文部時報』はじめ職務著作も多い）や和歌によって追いかけることができる。彼の回想を読むとかなり詳細な自らの記録や短歌を書きつけたものの存在も窺われる。

「犬丸秀雄関係文書」には起案文書はじめ多くの公文書が含まれる。戦後すぐの文書焼却命令の対象だったのか否か、なぜこの文書が犬丸個人の手許に残されたのか。関係文書を国立公文書館デジタルアーカイブで検索しても科学技術振興の文書はあっても科学文献蒐集翻訳速報事業等については見当たらない。犬丸の欧州での冒険譚は歌集などを通じて知ることができる一方、「犬丸秀雄関係文書」の公文書類は事業のエビデンスとして重要なものである。

犬丸秀雄の業績はあまり知られてはいないが、そのひとつひとつが今日まで影響力をもって続いている。水沢は、科学振興に意欲的な官僚がおり、研究者の意向を取り入れることにも積極的だった、という。戦後は人文科学の振興に力を注いだ犬丸について、さらに資料を集めて、分析をし、考察を深めていきたい。

¹ アート・ドキュメンテーション学会 2020 年度年次大会予稿集, http://www.jads.org/news/2020/jads_conf2020.pdf, (Accessed 2020-11-3)

² 水沢光「第二次世界大戦期における文部省の科学論文題目速報事業および翻訳事業：犬丸秀雄関係文書を基に」『科学史研究』52 巻 266 号(2013 年夏), pp70-80.

本村慈「文部省・文部科学省における文書管理と国立公文書館移管文書」『北の丸』第 43 号(平成 23 年 2 月), pp.118-153.

³ 国立公文書館デジタルアーカイブ, 「第四高等学校教授犬丸雄外四名任免ノ件」, <https://www.digital.archives.go.jp/das/image/M00000000000003121619> (Accessed 2020-11-3)

⁴ 文部科学省, 「一 学術行政体制の改革と発展」『学制百年史』, https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317864.htm (Accessed 2020-11-3)

⁵ 国立公文書館デジタルアーカイブ, 「人文科学委員会規程制定」
<https://www.digital.archives.go.jp/das/image/M00000000000000717122> (Accessed 2020-11-3)

⁶ NDL サーチ書誌 <https://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I000000012328-00> (Accessed 2020-11-3)

発表者プロフィール

赤間 亮（あかま りょう）

立命館大学アート・リサーチセンター副センター長
早稲田大学文学研究科中退。早稲田大学演劇博物館助手を経て、1991年から立命館大学文学部専任講師、現在文学部教授。
専門は演劇史、文化情報学。主な著作に『江戸の演劇書』（八木書店、2003）、共著書に『文化情報学ガイドブック』（勉誠出版 2014）、『文化情報学事典』（勉誠出版 2019）他。

橘川 英規（きっかわ ひでき）

東京文化財研究所文化財情報資料部 主任研究員
東京造形大学卒業。東京都現代美術館美術図書室、国立新美術館（設立準備室）情報資料室、東京文化財研究所での有期雇用職員、研究員等を経て、2020年から現職。専門は日本現代美術、美術資料。最近の論文に「日本戦後美術に関するアーカイブズの整理・活用のあり方—UCLA 図書館所蔵ヨシダ・ヨシエ・コレクションを例に」（『美術研究』430、2020年3月）、最近の編纂に「森田恒友書誌」（『森田恒友展』読売新聞社、2019年、田所泰氏と共編）など。

田村 彩子（たむら あやこ）

東京文化財研究所文化財情報資料部 研究補佐員
一橋大学社会科学古典資料センター、東京都立中央図書館、公益財団法人東洋文庫などで書籍を中心とした紙資料の保存修復に従事。2019年4月から現職。

筒井 弥生（つつい やよい）

筑波大学アーカイブズ 研究員
国際基督教大学卒、ハーバード大学サーティフィケート・オブ・ミュージアム・スタディーズ修了、学習院大学大学院ア

ーカイブズ学専攻博士前期課程修了。企業や団体等のアーカイブズ構築業務を経験。2012年から一橋大学大学院非常勤講師。2013年日本アーカイブズ学会登録アーキビスト、2015年米国アカデミー・オブ・サーティファイド・アーキビスト認定アーキビスト資格を取得。専門は博物館学、アーカイブズ学。著作等一覧：<https://researchmap.jp/TSUTSUIYayoi>

毛利 仁美（もうりひとみ）

立命館大学大学院文学研究科博士後期課程・リサーチアシスタント
立命館大学大学院文学研究科博士前期課程（文化情報学専修）修了。立命館大学ゲーム研究センターにてビデオゲームのデータベース構築、資料整理に携わる。専門はビデオゲームおよび関連資料のアーカイブであり、海外のゲーム所蔵館の調査を行うと共に、2019年にはゲーム分野最大の国際学会である DiGRA において、研究企画展示として「テレビゲームとその時代展①昭和編」を手がける。2019年より立命館大学衣笠総合研究機構リサーチアシスタント。

山路 正憲（やまじ まさのり）

立命館大学衣笠総合研究機構 研究員
立命館大学文学部文学科日本文学専攻卒業。株式会社廣済堂 IT ソリューション事業部などを経て 2011 年より現職。立命館大学アート・リサーチセンターが運営するデータベース管理者として、同センターのデジタル・ヒューマニティーズ分野の研究支援活動を行っている。

第 15 回 野上紘子記念

アート・ドキュメンテーション学会賞、同推進賞

推薦のお願い

標記の表彰は、2021 年度に第 15 回目を迎えることとなりました。今回も各賞の推薦を会員のみならずより募集いたします。本賞の発展にご協力くださいますよう、多くのご推薦をお待ちしています。よろしくお願いいたします。

賞の内容

◆野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞

『アート・ドキュメンテーション研究』、『アート・ドキュメンテーション通信』、その他の雑誌に掲載の論文・記事、図書、データベース、展覧会、ウェブサイトのなかから優れたものを選出。会員に限らない。対象となる論文・記事、図書、展覧会は、受賞年の前年度を含む過去 3 年間に発表されたものとする。(今回は 2018 年度～2020 年度のもの対象となります。)

◆野上紘子記念アート・ドキュメンテーション推進賞

アート・ドキュメンテーション関係業務の現場において、効果的かつオリジナリティを発揮した者あるいは機関を選出。会員に限らない。

推薦要領

自薦・他薦は問いません。以下の内容を、下記推薦フォームから、もしくは郵送、E-mail にてお知らせください。

- 1) 賞の名前 (学会賞、あるいは推進賞)
- 2) 被推薦者名・機関名
- 3) 推薦理由 **※まずは被推薦者・機関をご紹介いただく、簡単な内容で結構です**
- 4) ご推薦者名 ※JADS 会員に限ります
- 5) ご推薦者の連絡先 ※電話、ファックス、E-MAIL いずれかで結構です
- 6) 推薦資料 ※著書・論文の場合は書誌情報を、インターネット上の資料は URL をお知らせ下さい

推薦・問合せ先／推薦締切日

■推薦フォーム：<https://forms.gle/pyc6FXf46DL7FTV7A>



■アート・ドキュメンテーション学会 事務局 宛

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル 9F (株) 毎日学術フォーラム内

TEL：03- 6267- 4550 E-mail：maf-jads@mynavi.jp

※E-mail の際は、件名を「第 15 回野上賞推薦」として下さい。JADS ウェブサイトから推薦用紙をダウンロードできます

推薦締切日：2021 年 2 月 28 日 (日)

受賞者の決定

推薦を受けた候補者の中から、選考委員会が選出します。受賞該当者のない場合もあります。各賞の受賞者には年次大会時に、賞状・トロフィー・副賞を授与します。

本賞は、本学会の前身であるアート・ドキュメンテーション研究会発足の当時から会員であった野上紘子さんのご遺族からの寄付金 200 万円を基に設立されました。野上紘子さんはご生前、美術古書店リプロダールを経営されており、当時の研究会の整理 WG に熱心に参加されていました。

【第 1 回（2007 年度）】

学会賞：島本 澁 氏（京都精華大学）

『美術カタログ論：記録・記憶・言説』（三元社, 2005）の業績に対して

推進賞：美術図書館連絡会（ALC）

美術図書館横断検索の開発と公開に対して

推進賞：村上 正樹 氏（株式会社マイブックサービス）

本学会の組織基盤の形成と美術カタログを含むアートブックの普及に果たした功績に対して

【第 2 回（2008 年度）】

学会賞：加治 幸子 氏（元東京都美術館司書）

『創作版画誌の系譜 総目次及び作品図版 1905-1944 年』（中央公論美術出版, 2008）の業績に対して

推進賞：木村 三郎 氏（日本大学芸術学部）

美術史研究者の立場におけるアート・ドキュメンテーション活動、教育、研究、また近年のオウィディウス

『変身物語』プロジェクトにおける研究統括、デジタル・アーカイブ構築（<http://ovidmeta.jp/>）など一連の業績に対して

推進賞：中島 理壽 氏（美術ドキュメンタリスト・国立新美術館参与）

美術ドキュメンタリストとしての長年にわたるアート・ドキュメンテーション活動、とりわけ書誌・年譜等編纂に関わる一連の業績に対して

【第 3 回（2009 年度）】

学会賞：該当なし

推進賞：恵光院 白 氏

『美術家索引 西洋篇・東洋編』（日外アソシエーツ, 1991-1992）をはじめとする書誌作成、アート・ライブラリアンの草分けの一人として長年にわたる活動の功績に対して

推進賞：早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

80 年間たゆまず演劇関係資料を収集し、時代に沿いながら、あるいは先取りしながら、継続して資料の情報化・サービスを行われてきた功績に対して

【第 4 回（2010 年度）】

学会賞：研谷 紀夫 氏（東京大学大学院情報学環）

『デジタルアーカイブにおける「資料基盤」統合化モデルの研究』（勉誠出版, 2009）の業績に対して

推進賞：川島 良子 氏、椎名 節 氏、光田 由里 氏、相馬 理奈子 氏、大石 一義 氏

『村松画廊：1942-2009』（村松画廊, 2009）の制作に対して

推進賞：金井 杜道 氏（写真家、前京都国立博物館専門職員）

長年にわたる文化財を対象とした学術的資料写真の撮影の業績に対して

【第 5 回（2011 年度）】

学会賞：該当なし

推進賞：財団法人 観世文庫

長年にわたる能楽資料の保存と調査研究に基づく「観世アーカイブ」の公開に対して

推進賞：竺 覚暁 氏（金沢工業大学）

建築史・技術史ライブラリーおよびアーカイブズの重要性に関する社会的提言と実践に対して

【第 6 回（2012 年度）】

学会賞：該当なし

推進賞：笹木 繁男 氏

長年にわたる現代美術家の資料収集と公開活動に際して

【第 7 回（2013 年度）】

学会賞：独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館

『東京国立近代美術館 60 年史』の刊行に対して

推進賞：株式会社 東京美術倶楽部

『市井展の全貌—淡交会、珊々会、尚美展から東京会まで（戦前編）』の刊行に対して

【第 8 回（2014 年度）】

学会賞：岡野 裕行 氏

『文学館出版物内容総覧 — 図録・目録・紀要・復刻・館報』編集の業績に対して

推進賞：飯野 正仁 氏

美術館、美術専門誌におけるドキュメンテーション活動と『戦時下日本美術年表』の編纂に関わる業績に対して

【第 9 回（2015 年度）】

学会賞：金子 貴昭 氏

『近世出版の版木研究』（法蔵館, 2013）及び「版木閲覧システム」に対して

推進賞：松岡 資明 氏

ジャーナリストとして、アーカイブズの意義と重要性について社会の関心を喚起し、
制度の改革に寄与した報道及び著述活動に対して

【第 10 回（2016 年度）】

学会賞：豊川 斎赫 氏

『丹下健三と KENZO TANGE』および『TANGE BY TANGE 1949-1959／丹下健三が見た丹下健三』での
建築家丹下健三に対する二つの対照的なアプローチに対して

推進賞：リアス・アーク美術館

東日本大震災の被災生活者の観点にたつ調査記録作業とその展示活動に対して

【第 11 回（2017 年度）】

学会賞：高橋 晴子 氏 ならびに MCD プロジェクト

身装画像データベース＜近代日本の身装文化＞ および

『日本人のすがたと暮らし : 明治・大正・昭和前期の身装』（三元社, 2016）の業績に対して

推進賞：水谷 長志 氏

日本美術資料の国際的情報発信に関する現状把握と基盤整備にむけた業績に対して

【第 12 回（2018 年度）】

学会賞：京都大学古地震研究会

共同翻刻アプリケーション「みんなで翻刻【地震史料】」のオンライン展開における成果に対して

推進賞：該当なし

【第 13 回（2019 年度）】

学会賞：石原 香絵 氏

『日本におけるフィルムアーカイブ活動史』（美学出版, 2018 年）の業績に対して

推進賞：国立西洋美術館

『松方コレクション西洋美術全作品』全 2 巻（国立西洋美術館, 平凡社(発売), 2018-2019 年）の
編集・刊行に対して

【第 14 回（2020 年度）】

学会賞：宮崎 幹子 氏（奈良国立博物館）

特別陳列「重要文化財 法隆寺金堂壁画写真ガラス原板 一文化財写真の軌跡一」開催（於奈良国立博物館
2019 年 12 月 7 日－2020 年 1 月 13 日）および同図録刊行に対して

推進賞：文化財写真技術研究会

30 年にわたり文化財写真の撮影技術と保存・管理・公開方法の向上に寄与してきた実績に対して

※受賞者の所属は、授賞当時のものです。過去の受賞者は、学会ウェブサイトからもご覧いただけます

<http://www.jads.org/award/award.htm>

アート・ドキュメンテーション学会

刊行物販売のお知らせ

2020/11

本学会刊行物をご購入いただけます。お申し込みは毎日学術フォーラムまで（別途送料がかかります）。

◆刊行物バックナンバー

『アート・ドキュメンテーション研究』	第27・28号	(2020年5月刊)	定価¥3,000+税
『アート・ドキュメンテーション研究』	第26号	(2019年5月刊)	定価¥3,000+税
『アート・ドキュメンテーション研究』	第25号	(2018年3月刊)	定価¥3,000+税
『アート・ドキュメンテーション研究』	第24号	(2017年3月刊)	定価¥3,000+税
『アート・ドキュメンテーション研究』	第23号	(2016年3月刊)	定価¥3,000+税
『アート・ドキュメンテーション研究』	第22号	(2015年3月刊)	定価¥3,000+税
『アート・ドキュメンテーション研究』	第21号	(2014年3月刊)	定価¥3,000+税
『アート・ドキュメンテーション研究』	第20号	(2013年3月刊)	定価¥3,000+税
『アート・ドキュメンテーション研究』	第19号	(2012年3月刊)	定価¥3,000+税
『アート・ドキュメンテーション研究』	第18号	(2011年3月刊)	定価¥3,000+税
『アート・ドキュメンテーション研究』	第17号	(2010年3月刊)	定価¥3,000+税
『アート・ドキュメンテーション研究』	第16号	(2009年3月刊)	定価¥3,000+税
『アート・ドキュメンテーション研究』	第15号	(2008年3月刊)	定価¥3,000+税
『アート・ドキュメンテーション研究』	第14号	(2007年3月刊)	定価¥3,000+税
『アート・ドキュメンテーション研究』	第13号	(2006年3月刊)	定価¥3,000+税
『アート・ドキュメンテーション研究』	第12号	(2005年3月刊)	定価¥3,000+税
『アート・ドキュメンテーション研究』	第11号	(2004年3月刊)	定価¥3,000+税
『アート・ドキュメンテーション研究』	第10号	品切	
『アート・ドキュメンテーション研究』	第9号	(2001年7月刊)	定価¥2,500+税
『アート・ドキュメンテーション研究』	第8号	(2000年7月刊)	定価¥2,500+税
『アート・ドキュメンテーション研究』	第7号	(1999年9月刊)	定価¥2,500+税
『アート・ドキュメンテーション研究』	第6号	(1997年8月刊)	定価¥2,500(税込)
『アート・ドキュメンテーション研究』	第5号	(1996年8月刊)	定価¥2,500(税込)
『アート・ドキュメンテーション研究』	第4号	(1995年8月刊)	定価¥2,500(税込)
『アート・ドキュメンテーション研究』	第1〜3号	品切	
『アート・アーカイヴ：多面体：その現状と未来：記録集』	(2010年9月刊)	定価¥500(税込)	品切
『日本のアート・ドキュメンテーション：20年の達成：MLA連携の現状、課題、そして将来：予稿集・資料編』	(2009年12月刊)	定価¥1,000+税	品切
『国際シンポジウム：東アジアにおける美術・文化財情報のネットワーク化を考える：報告書』	(2005年1月刊)	定価¥1,000(税込)	
『arsの現場とツールの諸相Ⅱ』(ars-WG叢書・2)	(2000年3月刊)	定価¥1,000(税込)	
『報告書：シンポジウム：フランスにおける美術情報の普及と専門教育』	(1998年3月刊)	定価¥1,500+税	
『美術情報と図書館：報告書』	(1995年3月刊)	定価¥2,500(税込)	

◆お問合せ・お申し込み

株式会社 毎日学術フォーラム

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル 9F

Tel : 03-6267-4550 Fax : 03-6267-4555 E-mail : maf-sales@mynavi.jp

お申し込み方法 : <http://maf.mynavi.jp/hanbai/hanbai.html>

■アート・ドキュメンテーション学会とは

アート・ドキュメンテーション学会は、ひろく芸術一般に関する資料を記録・管理・情報化する方法論の研究と、その実践的運用の追究に携わっています。1989年4月に、美術館/博物館、図書館、アーカイヴ、芸術関連機関の新しい連携をめざし、わが国および国際間における文化的感性と芸術関連情報の創発的な協働のために開設されました。

さまざまな出来事や資料を記録・共有する作業は社会生活の根本をなす人間の営みですが、その理念や技術は現代の情報社会で急速に変容し、飛躍的に発展しています。芸術関連のドキュメントの持つ豊かな可能性は、研究・教育機関のみならず、地域のコミュニティーや個人的な活動でも開発される局面にあるでしょう。

本学会には、図書館司書、学芸員、アーキビスト、情報科学研究者、美術史・文学史・音楽史・メディア史・文化史・自然史研究者など、約350名の正会員、学生会員、賛助会員が所属しています。従来の美術館/博物館・図書館・公文書館・アーカイヴおよび学会といった機関や職能を超領域的に融合する新しい学術団体として、本学会は、新しい未知な課題に取り組む方々の参加をえて、活動を展開しています。

本学会は、アート・ドキュメンテーション研究会として創設され、1999年に日本学術会議の第18期登録学術研究団体(情報学・芸術学)に加入後、2005年4月に現在の学会名に改称しました。その後、伝統ある英国美術図書館協会(ARLIS/UK & Ireland)の*Art Libraries Journal*(2013, Vol. 38, No. 2)の「日本のアート・ドキュメンテーション」特集号の刊行に協力するなど、国際的視野にもとづいて現代社会の要請する人文学と情報学との連動を追究しています。

主な定期的活動として、年次大会、秋季研究集会、学会誌『アート・ドキュメンテーション研究』と会員ニュース

誌『アート・ドキュメンテーション通信』刊行ほか、さまざまな研究集会・見学会、グループ活動、国際交流を実行しています。学会内の各委員会・グループはつねに、今日的要請に即したデータベースの構築、アーカイヴ・デザイン、また個別的な応用課題の解決に取り組み、着実な成果をあげています。

■活動内容

- ・研究会、講演会、見学会の開催
 - ・地区部会とSIGの活動
現在、関西地区部会があり、自由に参加できます。
また、日常活動の場として、会員の興味に応じてSIG(スペシャル・インタレスト・グループ)を結成することができます。現在、美術館図書室SIG、デジタルアーカイブサロンSIGがあり、自由に参加できます。(地区部会・SIG連絡先：<http://www.jads.org/contact/contact.htm>)
 - ・インターネット・ホームページ(日本語版・英語版)の開設による情報提供・交換及びメーリングリストによる会員交流
 - ・情報・資料の収集・交換・提供
 - ・アート・ドキュメンテーション関係者の交流
 - ・季刊通信誌『アート・ドキュメンテーション通信』、年刊論文誌『アート・ドキュメンテーション研究』の発行
 - ・『アート・ドキュメンテーション関連文献目録』の作成・維持(上記『研究』並びにHPで提供)
 - ・『アート・ドキュメンテーション関係機関要覧』の作成・維持(HPで提供)
 - ・ドキュメンテーション関係諸機関・組織との幅広い連携
 - ・IFLA(国際図書館連盟)の協会会員として、美術図書館分科会の活動への参加・協力
 - ・ARLIS/UK等各国の同種組織との連携
 - ・国際会議等参加支援のための助成金の支給
- その他、この会の活動に必要な事業を行います。

■会員の特典

- ・本学会の行う研究会・講演会・見学会などの活動に優先的に参加できます。
- ・通信誌『アート・ドキュメンテーション通信』(年3回)、論文誌『アート・ドキュメンテーション研究』(年1回)の配付を受けられます(賛助会員は各2部送付)。

■年会費〔年度単位〕

会員種別により、以下の会費となります。

- ・正会員 6,000 円 (ただし、65 歳以上は 4,000 円〔自己申告制〕)
- ・学生会員 4,000 円 (大学学部、大学院などに在学中の学生。申込時に在学証明書または学生証のコピーを提出していただきます)
- ・賛助会員 (個人または機関・団体) 一口以上 (一口 30,000 円)
- ・団体購読会員 12,000 円

■ホームページ

- ・活動の詳細については、ホームページをご参照ください。
<http://www.jads.org/>

■入会方法

- ・HP から「入会申込書」をダウンロードし、必要事項をご記入の上、下記の間合せ先に郵送またはメール添付にてお送りください。役員会にて入会を承認された方に、初年次の年会費の振込用紙を送付します。なお、本学会は会費の入金をもって、入会手続の完了とします。

(入会申込書ダウンロード：

<http://www.jads.org/contact/contact.htm>)

お問合せ・お申し込み

アート・ドキュメンテーション学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1

パレスサイドビル 9F (株) 毎日学術フォーラム内

Tel : 03-6267-4550 Fax : 03-6267-4555

E-mail : maf-jads@mynavi.jp



Art Libraries Journal (2013, Vol. 38, No. 2)

「日本のアート・ドキュメンテーション」特集号

2020 年 5 月 31 日現在

『アート・ドキュメンテーション研究』 投稿の呼びかけ

『アート・ドキュメンテーション研究』編集委員会では、第 29 号（2021 年 5 月刊行予定）に掲載する原稿を募集しています。

論文は査読対象となりますが、その他に研究ノート、資料紹介、事例報告、書評なども歓迎いたします。詳しくは JADS のホームページの投稿規定をご覧ください。

投稿をお考えの方は、原稿の仮題と概要（400 字程度）を『研究』編集委員会までご連絡下さい。皆様のご投稿をお待ちいたしております。

■エントリー期限：2020 年 9 月 30 日（延長する場合あり）

■原稿提出期限：2020 年 12 月 15 日

（エントリー期間延長の場合、原稿締め切りを繰り下げる場合あり）

■査読・編集：2020 年 12 月～2021 年 5 月

■投稿規定：『アート・ドキュメンテーション研究』投稿規定

http://www.jads.org/pub/kenkyu_toko2013.pdf

■連絡先：『アート・ドキュメンテーション研究』編集委員会

E-mail: kenkyu_editor@jads.org

アート・ドキュメンテーション学会

第 13 回秋季研究集会予稿集

発行日：2020 年 11 月 28 日

編集：アート・ドキュメンテーション学会 行事・企画委員会

発行：アート・ドキュメンテーション学会

<http://www.jads.org/>